

I H R P
分野横断型
高校生研究
プログラム

第一回報告書



Interdisciplinary High School Research Program

0. 目次

| | |
|------------------|------|
| 1. 主催団体 | … p. |
| 2. 協賛・協力・後援 | … p. |
| 3. プログラム概要・詳細・日程 | … p. |
| 4. 参加者情報 | … p. |
| 5. 成果 | … p. |
| 6. 会計概要 | … p. |
| 7. 取り上げられたサイトの一覧 | … p. |
| 8. 参加者の声 | … p. |
| 9. 今後の展望 | … p. |

1. 主催団体

IHRP (Interdisciplinary High School Research Program) 実行委員会は、「高校生でもできること」「高校生だからこそできること」をコンセプトに掲げる、本プログラム主催団体です。高校生同士、高校生と研究者・企業の間“新結合”をもって社会問題へ斬新な解決策が創造されることを目標に、本プログラム企画立案から運営まで全てを高校生が行っています。以下、我々の掲げる3つのスローガンを紹介いたします。

①異分野融合

同一のテーマに対して、アプローチ・関心分野の異なる高校生が接する貴重な機会を提供することで、より多様かつ斬新な解決策の創造を刺激します。

②高校生でも出来ること

環境問題などに関する意識が向上してきている高校生が、行動を実際に起こすということを考えた時、高校生でもできる貢献の形として研究活動という道があるということを表しており、実際に行動に移していくということを重視しています。IHRPでは、協賛の方々などの支援を受けながら研究を進めていくため、個人での場合に比べて、よりレベルの高い研究活動ができ、また、成績優秀者は国際会議での発表の機会を得ることができます。

③高校生だからこそ出来ること

高校生だからこそできることとして、コンセプトの一つ目でも挙げられている、異分野の融合があります。柔軟な思考と言われるように、高校生は大人にも思いつかないような発想を生み出すあります。これまで関わったことのない異分野の研究を行なっている高校生と研究グループを組むことによって新たなアイデアが飛び出すことを期待しています。

2. 特別協力・協賛・特別応援・後援

特別協力



東京大学
大気海洋研究所
Atmosphere and Ocean Research Institute
The University of Tokyo

読売新聞社

協賛



特別応援



後援

メンターのご提供



メディア・成果発表パートナー

3. プログラム概要・詳細・日程

概要

「海洋プラスチック問題を解決するのは君だ」は「高校生でもできること」、「高校生だからこそできること」をコンセプトに、高校生の斬新なアイデアと日本屈指の専門家(約30人のメンター)の知見を組み合わせることで、海洋プラスチック問題解決に貢献することを目指す高校生により企画・運営されたオンラインプログラムです。海洋プラスチック問題という多角的な視点から議論可能な問題について、互いに住んでいる地域も、関心のある分野も異なる高校生同士を同一グループに配属させることにより、分野横断型の斬新なアイデアが創造されることを目的としました。2021年2月の最終発表で、優秀賞を獲得した3チームには、同2月に行われる「サステナブルブランド 国際会議 2021 横浜」での発表機会が与えられ、研究結果が社会へと発信されることを目指しました。

詳細

海洋プラスチック問題に関連した以下の3つのテーマに対して参加高校生の100人程度の募集を行いました。

テーマ1. プラスチック製品の代替使用

プラスチック問題の解決には、製品で使われるプラスチック自体を減らす取り組みが不可欠です。代替品を活用するのか、それともプラスチックの使用を工夫するのか。費用や環境への影響など様々な観点から比較し、効果的な解決策を導き出すことを目指しました。

テーマ2. プラスチックの回収・処理手法の最適化

処理段階において特に知名度の高いのは「リサイクル」です。費用や効率性について「リデュース」や「リユース」と比較しながら、リサイクルは果たして3Rの中でどれほど有効的な手段であり、どのように効率を上げられるのかを調べ、有効な案を導き出すことを目指しました。

テーマ3. プラスチックの海洋環境への影響の削減

近年、国際的な関心を集めているのが海洋プラスチック汚染です。海洋に流れ出たプラスチックが自然界にもたらす被害を減らすためには、どのような対策が必要でしょうか。「被害」が何を意味するのかについても考えてながら、斬新かつ有効な解決策を導き出すことを目指しました。

応募方法は、IHRP ホームページ、及び読売新聞社様のネットワークにより全国の高校に配布されたポスターに記された URL 経由で、選考課題を提出する方式としました。選考課題は以下の 3 問とし、提出方法は Google Forms としました。

<選考課題>

1. 自身の関心や研究、これまでの活動の自己 PR (400 字程度)
2. プログラムへの応募動機 (400 字程度)
3. 前述の 3 つのテーマから最も取り組みたいテーマを選び、そのテーマでの問題を解決するために現段階で考えられる具体的なアイデア (600~800 字)

参加希望者よりいただいた選考課題を、IHRP 実行委員会メンバーによる点数基準に基づいて厳正に選考し、応募者数 252 名から 98 名を選抜し、各テーマごとに約 10 人ずつの高校生グループを 3 グループずつ構成しました。

約 6 ヶ月間の研究期間で、それぞれのグループが多角的な視点から 2021 年 2 月の最終発表に向けて解決策を提案しました。尚、各テーマにおいて優秀賞を獲得したチームには、同 2 月に行われた「サステナブルブランド 国際会議 2021 横浜」での発表機会が与えられました。詳細なスケジュールは次の通りです。

日程

| 2020年 | | |
|-------|--------|--|
| 8月 | 19～20日 | 実行委員による選考 |
| | 24日 | メンターミーティング |
| | 30日 | <p>キックオフミーティング</p> <p>本プログラム受講生として選抜された100人の高校生と、メンターとの顔合わせとしてキックオフミーティングを開催。実行委員会メンバーが東銀座博覧にて集合し、オンライン生中継をした。プログラム概要の説明、アイスブレイク等を通して、半年間を共に走り抜ける仲間達との親睦を深めた。</p> |
| | |  <p>キックオフミーティングの様子</p> |
| 9月 | 13日 | <p>第二回ミーティング</p> <p>グループで顔合わせを行った後、事前課題の共有・チームの方向性についての話し合いを行った。メンターの助言を交えつつ活発な議論が成された。</p> |
| | 26日 | アイデア Lab |
| 10月 | 10日 | プチセミナー 保坂さん |
| | 18日 | プチ発表 |
| | 20日 | プチセミナー 秋元さん |
| | 30日 | プチセミナー 本田さん |
| | 31日 | プチセミナー 岩田さん |
| 11月 | 1日 | ファシリテーション講座 |
| | 14日 | 作戦会議 |
| | 22日 | <p>オンライン遠足 ハイプラ</p> <p>テーマ2の受講生へ向けて、徳島県へのオンライン遠足を開催。徳島県の「株式会社ハイプラ」さん工場見学ほか、鳴門のビーチクリーン活動を行う MEER の黒川さんよりお話を伺った。</p> |
| | 23日 | プチプレゼン |
| 12月 | 19日 | オンライン遠足 ハワイ |
| | 22日 | オンライン遠足 日清食品 |
| | 27日 | 作戦会議 |

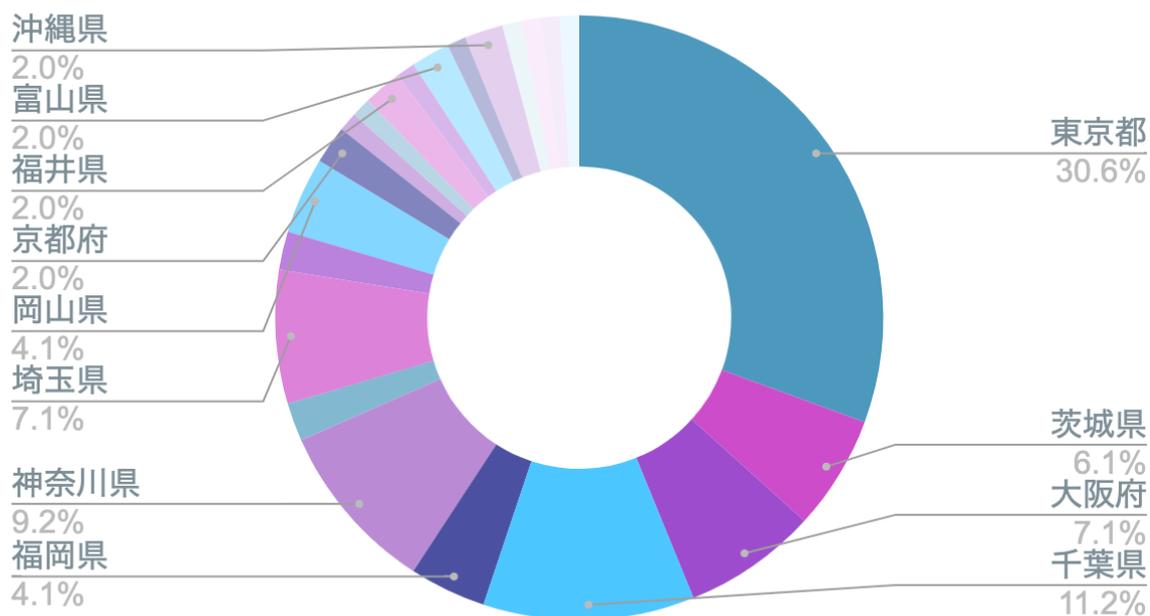
2021年

| | | |
|----|-----|---|
| 1月 | 10日 | プチプレゼン |
| | 17日 | プレゼン講座 |
| 2月 | 7日 | コンテスト当日 プログラムに参加した受講生が、半年間を通して築いた成果をチーム毎に発表した。聞くオフミーティング同様、実行委員がオフラインで集合し、オンライン中継。それぞれのグループの発表を経た後、メンターや協賛企業によるコメント・投票が行われ、2月24日にサステナブル・ブランド国際会議 2021 横浜にて発表する上位3チームが選抜された。 |
| | 24日 | サステナブル・ブランド 2021 横浜 2月7日に開催されたプログラム発表会にて選ばれた上位3チームによる発表及び実行委員会によるプログラム概要に関する説明を行った。  |

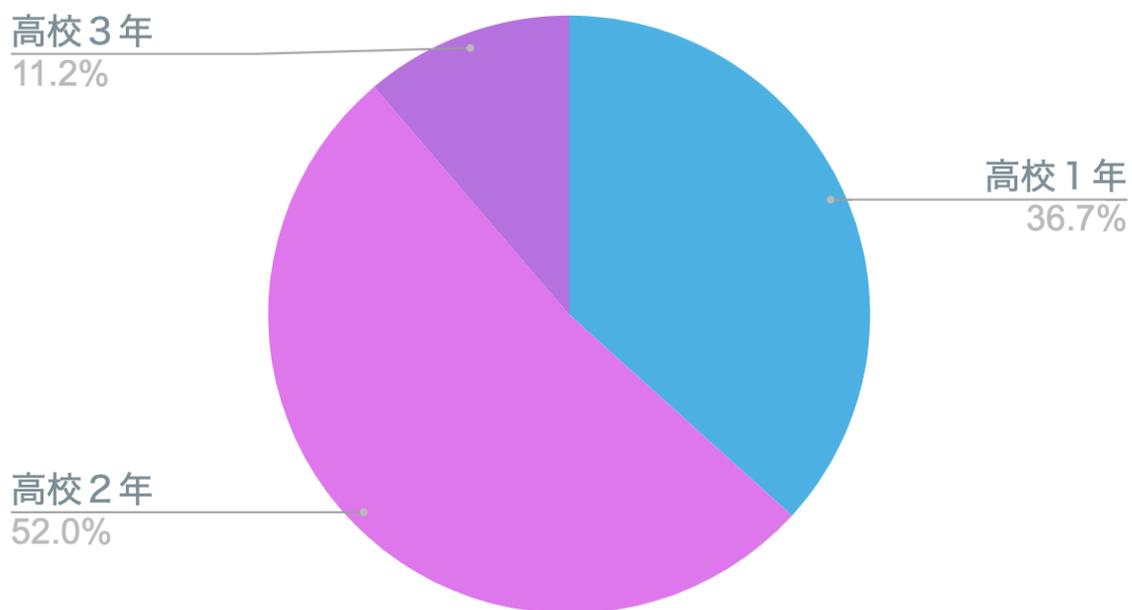
SBでの集合写真

4. 参加者情報

参加者在住都道府県別割合 (98人)



参加者学年別割合 (98人)



5. 成果

「サステナブルブランド 国際会議 2021 横浜」

本プログラムは、サステナブルブランド国際会議 2021 横浜
ブレイクアウトセッションレポートにおいて

オンラインオンデマンド視聴者ランキング

2位

参加人数（現地参加+オンライン参加）ランキング

4位

満足度ランキング

4位

の評価を得ました。

3つのランキングのトップ5に同時にランクインしたのは本プログラムのみです。

6. 会計

2021年5月3日

IHRP 実行委員会2020年度会計報告

| | |
|-----|-----------|
| 収入額 | 798,760 円 |
| 支出額 | 431,361 円 |
| 残金 | 367,399 円 |

収入の部

| 項目 | 収入額 (円) |
|-----|---------|
| 協賛金 | 798,760 |
| 合計 | 798,760 |

支出の部

| 項目 | 支出額 (円) |
|--------------|---------|
| WIX プレミアムプラン | 8,580 |
| Zoom 有料プラン | 188,398 |
| リーフレット印刷 | 2,288 |
| 書類郵送費 | 240 |
| IHRP 実行委員会印 | 2,310 |
| 参加者往復交通費・宿泊費 | 229,105 |
| 振込手数料 | 440 |
| 合計 | 431,361 |

7. 掲載メディア一覧

ウェブサイト

ウォータースタンド (2020.07.27)

<https://waterstand.co.jp/news/news_20200727.html>

読売新聞教育ネットワーク (2020.07.27)

<<https://kyoiku.yomiuri.co.jp/sdgs/jibun/contents/post-541.php>>

読売新聞教育ネットワーク (2020.07.29)

<<https://kyoiku.yomiuri.co.jp/sdgs/jibun/contents/post-549.php>>

読売新聞教育ネットワーク (2020.07.31)

<<https://kyoiku.yomiuri.co.jp/sdgs/jibun/contents/post-532.php>>

プラスチック・ジャパン・ドットコム (2020.07.20)

<<https://plastics-japan.com/archives/6157>>

オルタナ S (2020.07.29)

<<https://s.alterna.co.jp/social-issues/sdgs14-life-below-water/81720>>

笹川平和財団 (2020.08.04)

<https://www.spf.org/pioneerschool/news/20200830_ocean-plastic.html>

校外プログラム大全 (2020.08.06)

<<https://kininarukotomatome.com/ihrp-c0806>>

サステナブル・ブランドジャパン (2020.08.09)

<https://www.sustainablebrands.jp/community/column/detail/1197507_2557.html>

徳島新聞電子版 (2020.08.13)

<<https://www.topics.or.jp/articles/-/403979>>

徳島新聞電子版 (2020.11.30)

<<https://www.topics.or.jp/articles/-/454799>>

サステナブル・ブランドジャパン (2020.10.07)

<https://www.sustainablebrands.jp/community/column/detail/1198453_2557.html>

HI-PLA (2020.12.8)

<<https://hi-pla.jp/ihrptrp/>>

秋元技術士事務所 (2021.02.07)

<<https://ce-akimoto.com/archives/1411>>

東京大学海洋アライアンス (2021.03.10)

<<https://www.oa.u-tokyo.ac.jp/news-story/014.html>>

サステナブル・ブランドジャパン (2021.04.20)

<https://www.sustainablebrands.jp/news/jp/detail/1202001_1501.html>

サステナブル・ブランドジャパン (2021.04.20)

<https://www.sustainablebrands.jp/community/column/detail/1202002_2557.html>

Qulii

<<https://qulii.jp/online/13702/>>

新聞記事

読売新聞 2020年(令和2年)07月29日

徳島新聞 2020年(令和2年)08月13日

読売新聞 2021年(令和3年)05月05日

8. 参加者の声

プログラム後のアンケートより

自分の力で社会を動かすのはすごい難しいことだと思ってましたが、やろうという気持ちがあれば高校生でも社会を動かすことができると感じました。

今まで、自分が進めていくプロジェクトでこんなにも時間と労力を使い、毎日夜遅くまでミーティングをしてきたのは初めてでした。だからこそ結果発表の後に、人生で初めて嬉し涙を流すことができ、頑張ってたかったなって心から思えました！

初めてこのプログラムでチームに分かれて話し合った際、今まで出会ってきた同世代とは全く違う、自分と同じ理想を持っている「仲間」に出会えたことに、正直ワクワクが止まらなかったです。

オンライン遠足では海プラの実状を知ることができ、衝撃的でした。

多様な意見を取り込むことができた。人々の熱意と想像力がある限り、解決方法は無限にあるんだと感じました。

SB 登壇グループのコメント

1-a：企業と個人は密でいいんです！

「こんなに沢山の大人が本気で環境問題を考えているのか」これは私はSBの会場に着いた時に感じた気持ちです。

私たちのチームでは「環境問題に対しての意識を変える」ということを本気で考えてきました。私はSBに参加するまでは「環境問題に興味のない人が大人を含め沢山いるからもっと環境問題を考える事へのハードルを下げなければならない」と思っており、それが環境問題を解決するために1番大事なことだと考えていました。しかしそれだけではなく『それらの活動の発表の場を設けることや情報交換、話し合う場を

設けること』も環境問題を解決するためにはとても重要であることを感じました。私はSBに参加して日揮の社員さんをはじめとする多くの人と、環境について企業はどのように考えているかや私たちの案を進めるにおいてのアドバイスについてなどを直接話すことができました。私はこの経験を生かすために「活動の発表の場を設けることや情報交換、話し合う場を設けること」についてもっと考えたいと感じました。

3-a：～コインランドリーにおけるマイクロファイバーの削減～

SB やこのプロジェクトを通して得られたものといれば”ホンモノ“との出会いでした。洗濯業界の最先端にいらっしゃる OKULAB 様の方々やプラスチック汚染研究第一人者のロザリア・プロジェクト様などの企業様・このプロジェクトを立ちあげた高校生離れした実行委員会・専門家のメンターの方々などなど、私たちが関わったすべての人が我々の住む生活圏の人間とは一味違った方々でした。このプロジェクトによって高校生ができることの限界や逆に意外と実現できてしまうことなど色々なものを見方を知ることができたと思っております。また、自分たちで考えた非常にシンプルで簡単なコンテンツやソリューションでさえも実際に形にしようと動き出すと、色々な方の協力や色々な方への配慮等必要だと知りました。私たちはこれらの経験によって社会に出るといことはどのようなことなのかを知ることができたと考えています。最後に、前述した通りこのプロジェクトを始めるまで右も左も分からない高校生の集団である 3-a にここまで具体的なビジョンや視点を持たせていただいたのはSB やこのプロジェクトに携わったすべての方のお陰であるとグループメンバー一同思っております。半年間本当にありがとうございました。

3-b：スイシャケ号

私たち Lana チームは7カ月間、プラスチックの海洋環境への影響削減に向けて活動を続けてきました。

その中で、海洋プラ問題の解決には一人一人の行動が不可欠であると痛感し、私たちはそれぞれマイボトルを持つことから始めました。

そして、200時間以上の会議や水車の実験などを重ね、最終的な解決策として提示したのが清掃船です。その実現化に向けて実際に企業の方と zoom を繋ぎ、2月のサステナブルブランド国際会議への登壇では、自分たちの考えを多くの企業に伝えることができました。

このプログラムを通じて私たちが学んだことは、数え切れないほどあります。特に学びになったことは、オンラインだとしてもかけがえのない仲間ができること、自分たちで実験をすることの大切さ、文系理系に関わらず多様な経験と価値観を持つ高校生が集まることで、奇想天外なアイデアが生まれることです。

企業の方とのミーティングや、プレゼンを通して得た実践的なことも活用し、これからも課題解決に向け Lana は走り続けます。Lana は 11 人全員にとっての青春です。

9. 実行委員報告

糊澤哲

「高校生だからそんなプログラムはできない。」「高校生は大学受験勉強をするべきだ。」我々はラベル付けをすることが好きだ。そしてこれは「高校生」という身分に限ったことではない。学問の分野においても意識的・無意識的にラベル付けは行われている。経済学者を化学実験室でみることはないし、生物学者が古代文学を読んでいる姿もなかなか見ない。さらに言えば、同じ分野であったとしても、例えば大学の研究室では隣の研究室がどのような研究を行なっているのかということすら詳しくは知らないことが多い。

しかし、このラベル付けは便利ではあるが、我々を制限しているということも忘れてはいけない。はじめの高校生についてのラベルは高校生が「普通」の活動以外の活動をすることを躊躇う理由になるし、分野同志の隔たりはイノベーションの基本である、異分野の融合を大きく妨げている。

このプログラムはそんな、ラベルに囚われることに真っ向から対抗した結果誕生した。「普通」は受験勉強をしている高校3年生を中心に運営し、「普通」は研究をすることのない高校生が研究をする機会を提供し、「普通」は関わることのない研究者と高校生がタグを組み、「普通」は組み合わせられない異分野同士が融合し、海洋プラ問題を解決するための解決策の作成を行なった。

そしてプログラムが終わった今、ラベル付けは不必要だという思いは確信に変わった。さて、今度はどんな「普通」に抗おう。

松本杏奈

全ての発端は、糊澤からの相談だった。生まれ育った環境や価値観など何もかも異なる中、唯一分かち合えたのが、徳島県で育った私が幼少から問題意識を抱いてきた海洋環境保全であった。

高校生という肩書き、経済的・地理的な困難、生活環境、あらゆる要素を網羅したのがこのプログラムの最も大きな利点であるオンライン開催、そして協賛企業やメンターによる恵まれた学習環境だった。多様な高校生と、環境問題に立ち向かう戦友として協働したことで、先の見えぬ社会問題解決に希望を見出すことが出来た。

今回の開催を通して、あらゆる格差の是正を微量ながらも達成出来たと確信している。そして変わらぬ毎日の中で、絶対に出会う事なかった仲間と共に、不可能だと思っていた問題に対し実際に解決の一步を踏み出した経験は、将来の選択肢を増やす

に違いない。今後とも、社会を少しでも変え、そして多くの人の視野を広げられるよう、邁進したい。

大森智加

最年少ながらも委員長に任命された私は、右も左もわからないまま、手探りの中で仕事をこなした。ワクワク感を大切にひたすら突き進んだ。

数え切れない高校生とメンターの方々と接する中で、ある一つの疑問を抱いた。高校生と大人の違いとはなんだろう。悩んだ時に、ある一つの言葉と出会った。You are not only responsible for what you say, but also for what you do not say. 宗教改革を牽引したマルティン・ルターの言葉だ。

実行委員長はプログラムの舵取りを率先して行うと同時に、判断をくださなかったことにも責任を持った。そこで気づいた。大人と高校生の最大の違いは、自分の発言や判断はもちろん、自分が触れなかった事柄にも責任を持てるか否かではないか。逆説的かもしれないが、高校生であっても「大人」になることは十分可能であることを痛感した。

峯川優也

「環境問題に関するプログラムを運営しないか？」突然の連絡。差出人は糊澤と松本。過去に知り合った二人。そして、海洋プラスチック問題に大きな関心を持っているわけでは無かった僕。しかし、この仲間となら挑戦できると直感で信じた。こうして僕は環境問題とプログラム運営という未知の領域に足を踏み入れたのだった。

そこから数ヶ月間、協賛企業様方との連絡や銀行口座開設といった未体験の事務作業を、全てをネットで一から調べながらこなした。敬語の使い方でさえ通学中の電車の中で何度調べたことだろうか。何度もミスをした。だがこの経験は大学以降の活動への大きな自信になるに違いない。

僕は今、実行委員の皆や専門家との交流を経て、サステナビリティに敏感になるほど環境問題に関心を持っている。そして、本プログラムに参加してくださった高校生の皆さんが、未来をより良いものへと導くような活躍をすることを期待したい。

小林りこ

高校生が考えたアイデアは、決して机上の空論ではない。この点は、本プログラムの最大の特徴だと考えている。私たちは、オンライン遠足やアンケートなど、制限された環境の中で最大限工夫をして現状把握に努めた。そして問いを大切にしながら、ステークホルダーを洗い出し、海洋プラを取り巻く「課題」を見出し、様々な企業に連絡・相談し、実社会に働きかけることを見据えて全力でアイデアを練り上げた。

サステナブルブランド国際会議が行われているように、昨今企業の活動においてもサステナビリティの追求は無視できない。しかし、どこかSDGsを謳うことが目

的化している側面もあるのではないだろうか。だからこそ、本気で未来を考え、はたらきかける高校生のインパクトは小さくないだろう。高校生はもはや、理想を語り大人に実現をお願いする存在ではなく、自ら働きかけることができると改めて可能性を感じている。

100人の高校生で地球の未来を考え課題解決を追求したこの半年間は、新たな気づきとより良い未来に向けた変化につながっていくと確信している。

小泉みのり（サポーター）

私が最初にこのプログラムの企画・運営に携わろうと思ったのは、高校在学中に社会的立場の弱い高校生の研究が十分に支援されていないと感じ、悔しい思いをしたからだった。高校生が高校生のために作り上げたこのプログラムでは、高校生の目線から全国の高校生参加者を研究者、企業とつないだ。そして、Slackでの事務連絡から毎回のミーティングの運営まで全て実行委員会の棚澤と大森を中心とするメンバーがこなしていた。

このプログラムが他と違う点として、高校生が全て運営していることがある。一年前に高校を卒業してしまった私は、そんな実行委員会を邪魔しないよう、サポーターという立場で、実行委員の補助をさせてもらった。ちょうどあのパンデミックが始まるか始まらないかというタイミングで動き出した実行委員会は、全員が学業や課外活動で多忙な合間を縫って、毎回のミーティングは21時以降にスタートした。各々が異なるバックグラウンドで培ってきた知識や経験を共有し、最善を話し合った。このメンバーで実行委員会が結成してから一年間も経たないうちに、ほぼZoomでしか会ったことのないお互いを思いやるチームが出来上がったのは何よりの不思議である。来年度のプログラム形式は未定であるが、このメンバーと次は何を創り上げられるのかと今から胸を躍らせている。

10. メンターからのメッセージ

テーマ2メンター：高等教育推進機構 准教授 三上 直之 様

メンターとしての参加を通じて最も印象的だったのは、実践的な研究を通じて社会問題の解決に取り組む機会を高校生自身が創り出そうという、実行委員の皆さんのビジョンの確かさと、それを具体的なアクティビティに落とし込んで実現する行動力でした。それらに触発されて、多数の高校生が全国から集まり、個性あふれる知的探究が繰り広げられる様子には目を見張るものがありました。参加者、そして実行委員の皆さんも、このプログラムを通じて、環境問題に関する知識を深めるだけでなく、他者と関わりながら自らの手で新たな学びの場を創り出す技法についても、無意識のうちに多くのことを身につけられたと思います。そのことをぜひ自覚的に捉え返して、今後の活動や勉強に生かしてほしいと願っています。各プロジェクトに熱心に取り組んだ参加者の皆さん、そしてこの画期的なプログラムを構想して、みごとに運営しきった実行委員の方々に心から敬意を表したいと思います。他のメンターや、東京大学、読売新聞社を始めとする関係者の皆様にも大変お世話になり、ありがとうございました。

テーマ3メンター：アミタ株式会社 本多 清 様

テーマ3では海洋プラスチックがもたらす影響について各チームが課題を抽出し、解決策に向けた創意工夫が重ねられました。3-aチームは「コインランドリーにおけるマイクロファイバーの削減」という身近な課題に着目し、いったん流出すると回収が極めて困難なマイクロファイバーを発生元で回収するという即時性の高い解決策を編み出しました。3-bチームは海洋プラの大部分が河川から流出している現状に着目し、河川でプラを回収する「スイシャケ号」を考案し、農業用水路でプラ回収をする装置「リベンジンベエ」の実証試験や普及啓発に向けたオリジナル紙芝居を創作しました。そして3-cチームは惜しくもSB進出こそ逃しましたが、エコ商品を選択することでポイントが貯まる画期的なシステムの構想で消費者行動の変革を目指しました。どのチームも着眼点が非常に素晴らしいことが印象的でした。今回の取組みは各メンバーの人生の宝物となるでしょう。

11. 協賛からのメッセージ

読売新聞社

全体を通して、予想以上に充実したプログラムになった。プログラム成功の秘訣は高校生（主催者と参加者）が自ら、企画・運営し、企業や研究者などと交渉した突破力に尽きる。協賛企業やメンター役の研究者など数多くの大人を巻き込んだ。

一方で、9チーム100人の高校生を丁寧に見ていけるかということ、これは難しい。それが逆に高校生の自主性を生み、企業や研究者に自らの意思で果敢に接触したのが良かったのかも知れない。

読売新聞は今回、東大とともに「特別協力」という言葉で参画した。その本意は「主催」はできないと、社内で念押しされたからだ。つまり、「事業として採算が取れないのなら、手弁当でやる分には黙認する」ということ。参加高校生の募集は本紙記事と読売の人脈は貢献できたが、事務局機能を半年間にわたって次年度もやれるかということ、それは疑問だ。

ウォータースタンド株式会社

海洋プラスチック問題は、当社としても常に情報収集している重要な社会課題です。こうした課題に取り組むことは、企業として果たすべき社会への責任ですが、こうした認識の下での活動はともすると義務的なつまらないものとなりがちです。一方、最終発表頂いた各チームのアイデアは柔軟で想像力と創造性にあふれ、事業性という点でも今後の社会実装に期待を感じました。発表プレゼンの中で「消費者の7割は価格で購買を決定する」との調査結果がありました。環境に配慮した消費行動が非合理的なものであるならば、私たち企業は「軽やかで楽しく、環境負荷軽減を両立できる」ような工夫を怠らず、消費者の皆様との対話によって活動を進化させていく必要があります。この度メンター企業として参加させて頂き、当社の事業のあり方を再考する機会になりました。皆さんと共創の機会を頂いたことに感謝申し上げます、また今後も継続させて頂けますようお願い申し上げます。

海外トップ大進学塾 Route H（ベネッセコーポレーション）

「海洋プラ問題を解決するのは君だ！」の運営・参加者の皆様、プログラムの終了、お疲れ様でした。初めてのプログラムで、企画・運営に携わった皆様は大変だったと思いますが、全国の高校生に、海洋プラ問題への意識喚起に貢献された点、第1回にも関わらず、研究者・メンターの皆様や、協賛をしっかりと集めてプログラムの信頼を高め、参加者100名という大人数の規模のプログラムを無事終了された意義は大きいです。また、高校生の皆さんに、単に勝負を競うという意識ではなく、問題解決を長期的視点から考える姿勢を作ることに貢献できたのではないかと思います。参加者が多いことで、知識・調査力・やる気などに差もあったと思いますが、ある高校生から「始めは実力の違いに焦りも感じましたが、刺激にもなり、より調査をし、長期的な視点で考えることができました」という声をお聞きもしました。今後のさらなるプログラムのご発展を期待しております。

12. 今後の展望

本プログラムも、2020年度はひとまずここで終了となります。高校生の高校生による高校生のための研究プログラム、なんて突拍子もないアイデアにも辛抱強くアドバイスをくださり、最後の最後まで応援して下さったすべての関係者の方々、そして粘り強く解決策を考え、果敢に、楽しみながら挑戦して下さった参加者全員に御礼申し上げます。

このプログラムはひとまず終わりを迎えたとしても、私たちの前に立ちはだかる海洋プラスチック問題に終止符が打たれた訳ではありません。むしろ海洋汚染を取り巻く現状は、新型コロナウイルスの感染拡大により後手をとっていると言えます。参加者や関係者の方に限らず、この記事を読んでいる皆さんにとっても、本プログラムの存在が社会問題に目を向け続け、疑問を持ち、行動を取るきっかけとなることを切実に願います。これは終わりではなく始まりなのです。

海洋プラスチック問題を解決するのは私達だ！